

史跡西寺跡発掘調査  
—— 現地説明会資料 ——

1979. 3. 3

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 史跡 西寺跡 発掘調査 終了報告

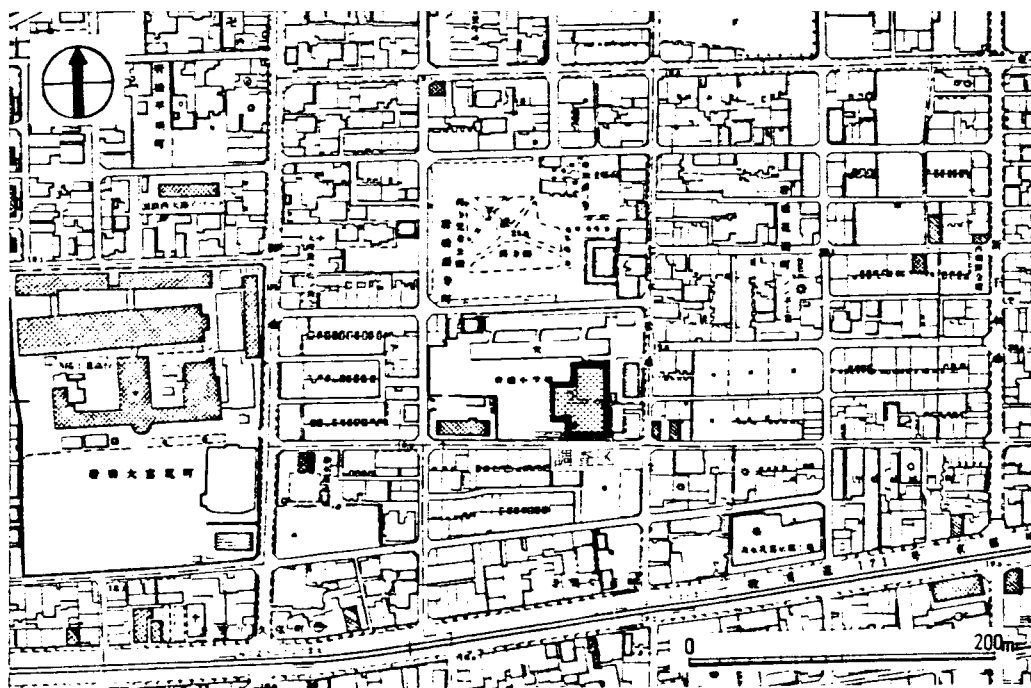
唐橋 小学校 敷地内

(第1次調査分)

## I はじめに

今回の調査は、財団法人 京都市埋蔵文化財研究所が京都市立唐橋小学校校舎改築による現状変更にあたり、京都市からの委託により行なったものである。

昨年12月16日より既存の校舎コンクリート基礎撤去を行い、19日より発掘を開始した。現在も調査は継続中である。調査面積は約1500㎡である。調査区は、唐橋小学校敷地内の東側にあり、西寺跡の東回廊部分に位置する。今回の調査は、東回廊部分を明らかにすると共に、昭和45年に平安博物館がプール建設の際確認した東西方向の築地がどのように続き、その性格がどのようなものであるかを明らかにすることである。



調査位置図

## Ⅱ. 調査の概要

現在この付近の地形は、ほぼ平坦であるが、地層の断面観察より判断すると、砂礫層と砂泥層が交互に堆積し、北西から南東へ徐々に下がっていることが明らかになった。旧校舎の整地面から西寺造営面までの層には、旧耕土や床土、整地土が認められ、床土、整地土中から中世の瓦器椀、青磁、平安時代の瓦が少量出土している。また、西寺造営面の下層の砂礫層は古墳時代の遺物を包含している。このように、調査によって確認された西寺の遺構は、古墳時代の堆積層を平坦にして、その上に造られている。

### 〈遺構〉

#### 東回廊 (SB01)

調査区西部で回廊跡を検出した。基壇そのものは、後世に削平され、残存状態は悪い。しかし、凝灰岩切石列(延石)および溝状をなす切石列抜き取り痕跡などから、回廊の位置および規模が判明した。延石は東回廊東部および南部が比較的良く残っており、特に東南部では地覆石も残っている。回廊幅は約10mである。礎石および根石の残存はまったく認められなかった。しかし、掘形がわずかにあり、一辺約1mの方形である。

### 築地 (SA02)

調査区東部に南北方向に築地1条を検出した。上部はすでに削平されおり、わずかに一部分基底部が残る。築地の基底部幅は2.1m(7尺)である。残存状態が悪いため犬走りは不明である。

### 溝 (SD02)

築地の西側で南北方向に検出した。築地に伴う溝であり、幅2.1m、深さ約70cmのU字形を呈する。溝の下層には石礫の混じる土が堆積し、水が流れていたことがうかがえる。また上層では多量の瓦と石が出土し、溝を埋める際に投棄したものと考えられる。この溝は南側では幅が広くなり、東西溝(SD01)と合流する。

### 溝 (SD01)

調査区南端で東西方向に検出した。この溝は南大門に取り付く築地の北側溝である。既存校舎の基礎のため北岸が壊されているが約幅2.1m深さ30cmと比較的浅く、レンズ状を呈する。SD02南北溝との合流付近では底は下がり深さ70cmである。

### 門跡 (SB03)

調査区東南部北で検出した。SB03も他の遺構と同様削平され、残存状態は悪い。SB03の基壇には掘り込み地菜

が認められない。また基壇化粧を行なった痕跡は認められない。基壇の大きさは南北約6.3m、東西約3.9mである。建物は四脚門と考えられ、凝灰岩切石の礎石が4個残存する。そのうち1つは最も残りが良く、長辺56cm以上、短辺50cm以上、厚さ20cmである。建物柱間寸法は桁行柱心々4.5m(15尺)、梁行柱心々2.1m(7尺)である。この門跡には北側では築地(SA02)が取り付くが、南側では溝(SD02)が広がるため、築地が取り付かないと考えられる。

その他の遺構として、調査区北部にて数ヶ所土塚を検出した。規模はそれぞれ大きく、埋土に焼土を多く含むものや凝灰岩片を含むものもある。

#### 〈出土遺物〉

SD02南北溝から多量の瓦類が出土した。軒丸瓦・軒平瓦は、ほとんど平安時代前期の瓦である。他に鬼瓦が2隻出土した。土器類は唐三彩、土師器の皿、杯、高杯、甕および須恵器の杯蓋と壺が出土しているが、いずれも破片である。

# 史跡 西奔跡 発掘調査 終了報告

唐橋小学校敷地内

(第2次調査分)

## 1. 調査の概要

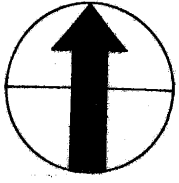
今回の調査は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が、京都市立唐橋小学校校舎改築による現状変更にあたって、京都市からの委託により、1979年5月1日より5月25日まで行った調査であり、調査面積は約80㎡である。調査正は、小学校敷地の北東側に位置し、昭和45年にプール建設の際、平安博物館が調査し、東西方向の築地を検出し、其所の北側に所在する。

## 2. 遺跡の基本層序

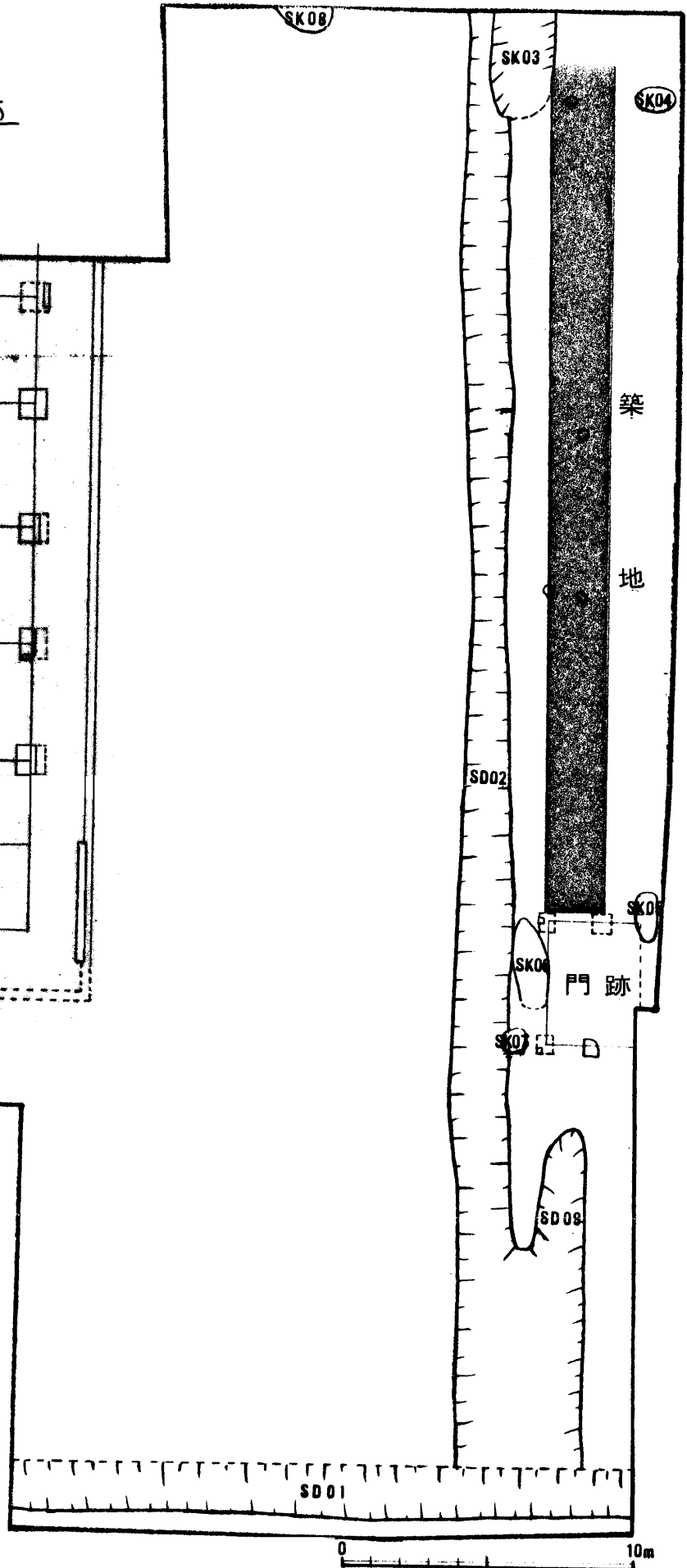
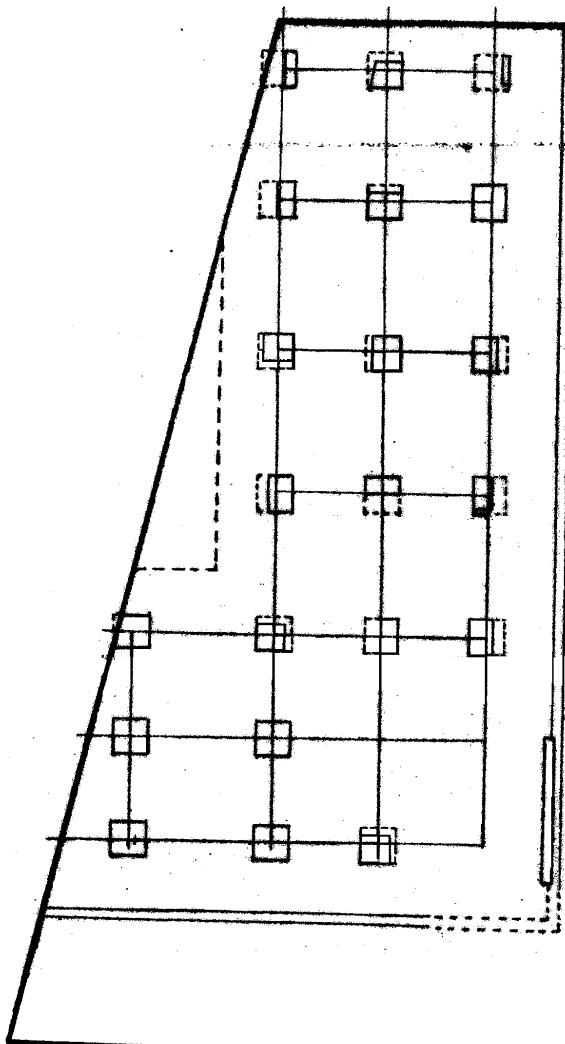
調査正全体が現代の擾乱を受け、現状では、水溝かに北壁と西壁の一部で観察できるのみであった。それらは校舎を作る時の整地層が約150cm堆積し、その下に順次 黒灰色泥土層(耕土) 200cm、茶褐色砂泥層(床土) 50cm、淡灰色砂泥層150cm、暗茶褐色泥砂層250cm、灰色混礫砂泥層100cmという堆積相であり、その下の茶褐色の礫層からは、遺物は検出されていない。

## 3. 検出した遺構及び出土遺物

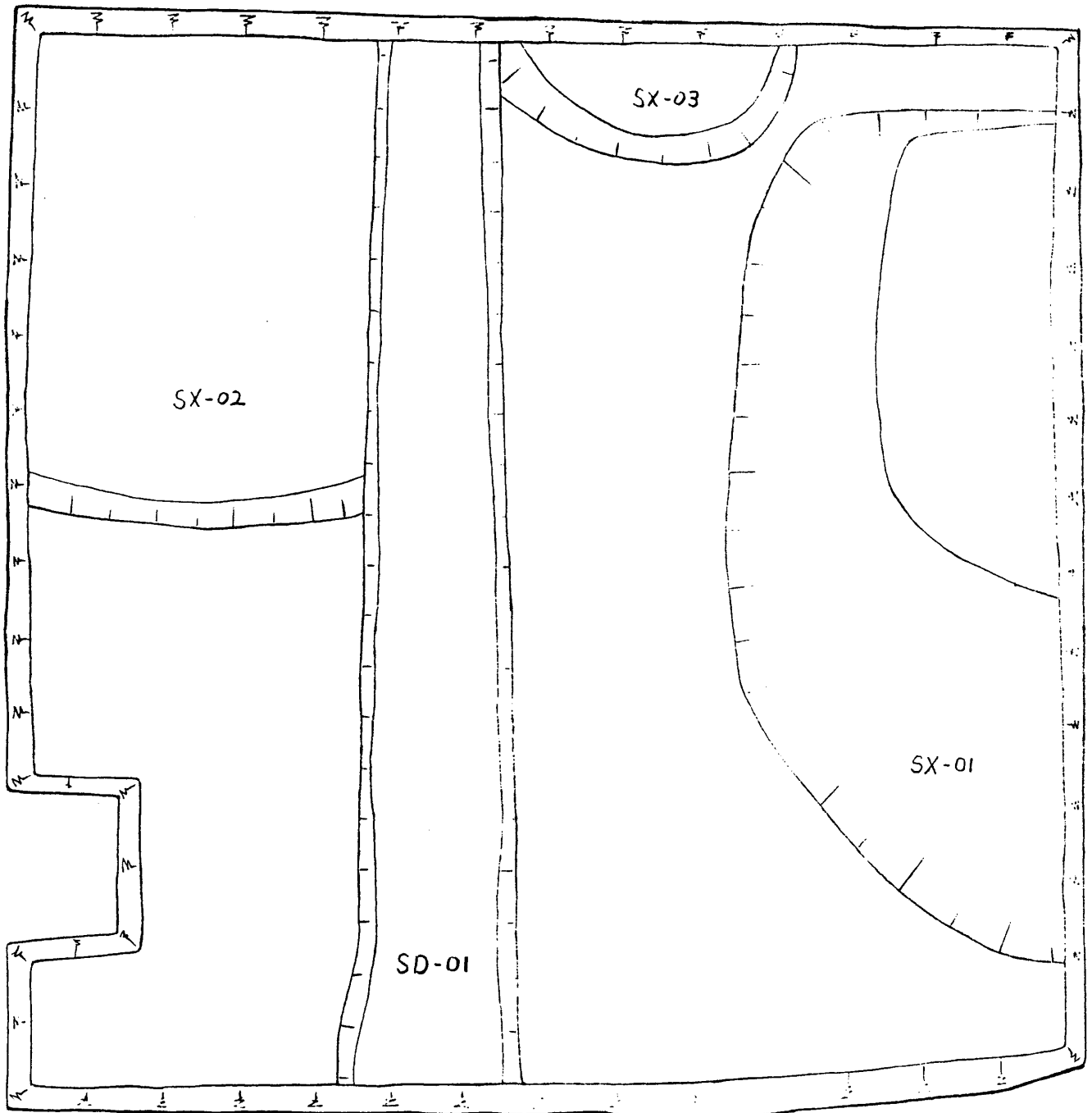
今回の発掘調査によって検出した此の遺構は土師器、須恵器を含む瓦溜に2例検出したにだけである。溝(SD-01)は幅約40~60cmで深さ約30cmである。出土した遺物は平安時代のものであると思われる丸瓦、平瓦及び土師器の小片が出土しているが、下層からスプーン、ビニールが認められ、かなり最近に攪乱を受けられたものと思われる。落ち込み(SX-01)からは檼瓦、染付、レンガ、理札の陶磁器類が出土している。瓦溜(SX-02)からは多量の平安時代の瓦が出土した。これらはほとんど平瓦であるが、軒丸瓦、軒平瓦も数点出土している。また土師器の皿、杯、高杯、須恵器の皿、杯、壺の破片であるが出土している。瓦溜(SX-03)からも、平安時代の平瓦と少量の軒平、軒丸瓦及び土師器の小片が出土している。これら瓦溜から出土した土器は、土器の形式、瓦の型式から西寺時代のものであると思われるが、45年に検出した此の東西方向の築地及び西寺に關係する建築物の遺構は検出されなかった。

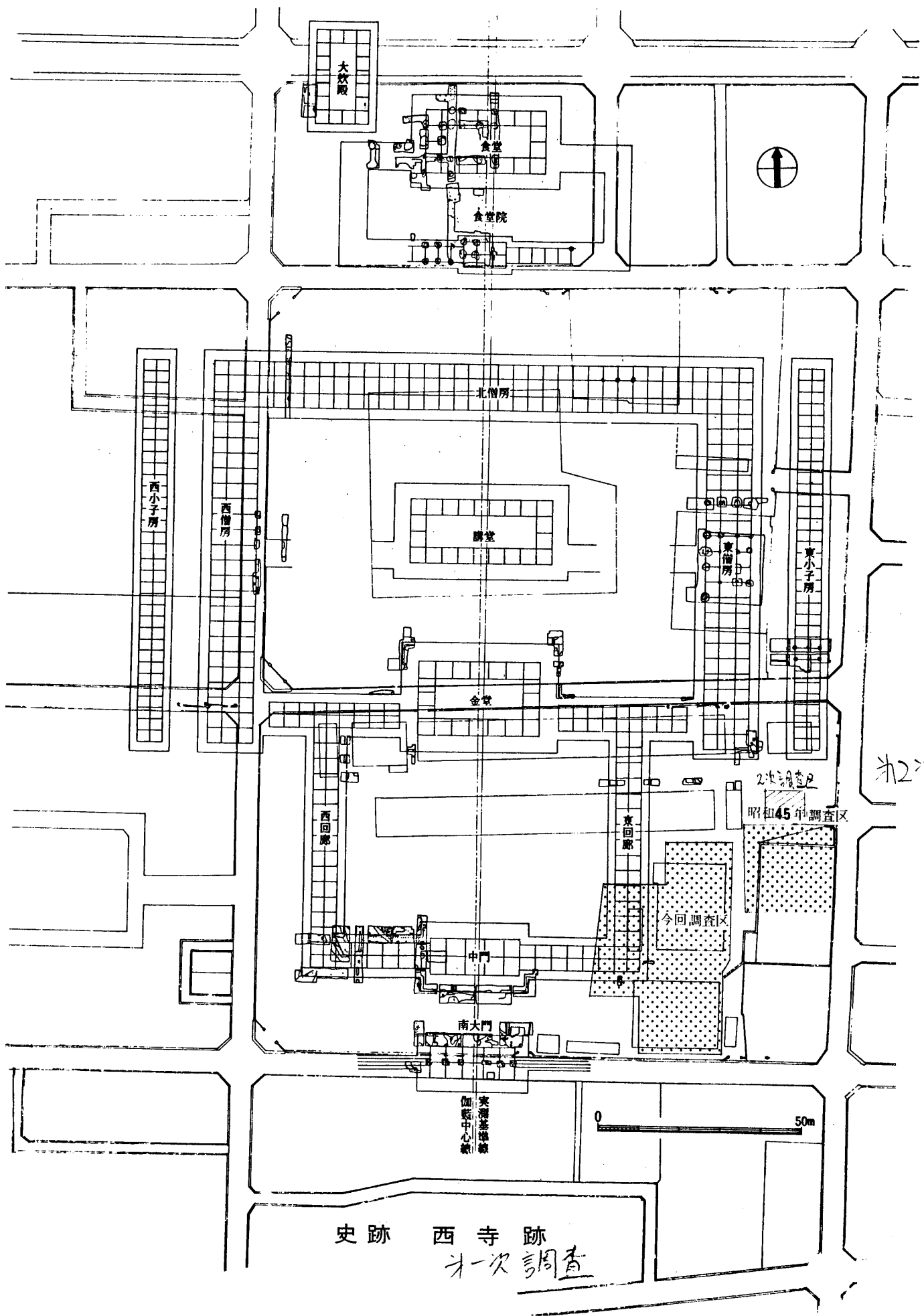


第一次調査









2次調査

2次調査区  
昭和45年調査区

今回調査区

史跡 西寺跡  
1次調査